

IV 松本秀峰中等教育学校

1. 基本方針とそれに沿った中核的事業実践

中等教育学校6学年が揃う完成年度であり、中等教育学校の利点の一つである「異年齢集団による活動が行われることで、より社会性や豊かな人間性を育成できる」ことを念頭に中・高校生が共に活動することの利点を生かした教育実践に、これまで以上に意識的に取り組んだ。更に、本校教育の真価が問われる進路実績を残すための一期生に対する詰めの進路・学習指導にも全力を挙げ、各方面から評価をいただける結果を出すことができた。

また、生徒募集活動の強化のため広報部を新設し、諏訪清陵附属中学校など他の学校選択競合校との差別化をより意識した活動を展開し、本校の独自性を具体的にアピールした。

2. 主な個別的事業

1) 6年一貫カリキュラムの再構築

完成年度として、進路指導および生徒に対する各種指導において6年間のプロセスを再検討するとともに、学年行事、生徒会、部活動等の見直しを図り、中等教育学校のメリットを最大限に生かした異年齢集団による人間性および社会性の育成に努めた。また、昨年に引き続き、自主的活動としての生徒会、部活動での組織再編および規約の整備を行った。

2) 授業および学習指導

5学年より「系統選択制」を導入し、Exceed系統（最難関大学志望）・Accomplish系統（国公立大志望）・Obtain系統（私立大学志望）の3系統に分け、進路目標に合わせた授業を展開した。

また、放課後セミナーの充実による学習時間の確保を行い、後期課程生の学力伸長および受験対策の一助とした。更に、6学年の進路指導として、面談機会を増やし、希望進路実現を図った。

3) 学校生活等に係わる事項

通学時の電車マナーなども含め、「秀峰生らしさ」について考えながら日々行動することに心がけるよう指導。生徒会活動でも“考える”機会を設け、意識ある学校生活を指導した。また、6年間を見通した生活指導計画を作成するとともに、学年単位の取り組みの強化と、年齢に応じた適切な指導内容の検討を随時行い、充実を図った。学校安全についても、防災訓練や自転車通学指導など外部との連携を図りながら充実させた。

4) 東大入試問題分析会の実施

各教科会で東大入試問題分析を行い、他教科教員も参加する分析会を実施。生徒の学習課題と今後の指導方針について検討するとともに、日々の授業を見直す契機とした。

5) 行事など取り組みの改善

秀峰祭は、これまで通り9月下旬に2日半の日程で行ったが、6学年は自由参加とした。また、昨年同様、生徒会行事として6月にスポーツイベントを行った。

6) イギリス海外研修

3回目のイギリス海外研修を実施。国際情勢を鑑み、慎重に保護者と連絡を取りながら実施を決め、成功裏に研修することができた。過去の海外研修での反省を十分に生かしたプログラムとして充実した内容となった。

7) “特性・個性・才能の発見と育成”

「ふれあい集会」を生徒会の企画・運営とすることにより、これまで以上に多くの生徒が活躍

できる場を増やすことで、生徒一人ひとりの特性・個性の発見と育成を図った。

3. 生徒支援等

1) 健康管理

養護教諭と校長が信州大学小児科などと密接な連携を図りながら行った。

2) PST 活動

学級および学年のつながりを基盤とした活動の充実を図り、年間の授業参観・学級懇談日を見直し、担任および保護者の相互理解を深めた。

4. 生徒の状況

1) 生徒の在籍状況 (H28. 3. 31 現在) ※今年度海外帰国生の編入は 0 名

1 学年 80 名 (男子 39 名、女子 41 名) / 2 学年 86 名 (男子 35 名、女子 51 名)

3 学年 81 名 (男子 42 名、女子 39 名) / 4 学年 82 名 (男子 43 名、女子 39 名)

5 学年 76 名 (男子 34 名、女子 42 名) ※6 学年卒業時 81 名 (男子 39 名、女子 42 名)

2) 生徒会 (委員会・部活動)

これまでの蓄積が活かされ、いずれの活動も自主的取り組みが顕著になってきた。また、一貫性に配慮しながら活躍の場を増やすことで活性化させることができた。

5. 進路状況

卒業者数 81 名 (男子 39 名、女子 42 名) / 合格者数 73 名 / 進学者数 67 名 / 就職者数 0 名

6. 教職員採用状況

平成 28 年度採用は 5 教科に欠員が生じ、複数回採用試験を実施。国語 3 名・社会 1 名・数学 2 名・理科 2 名を新規に採用したが、英語での常勤採用ができず非常勤の採用とした。平成 29 年度には国語・社会・英語の採用を予定しているが、適任者を採用するため、積極的な採用方法を講じたい。

7. 広報活動

ホームページをリニューアルし、より広範囲に情報が伝達する工夫を加えたり、これまでの 6 年間の取り組みを伝えるテレビ番組を製作する等、積極的な広報活動を行った。大学合格実績が出たことにより、本校の「出口 (進路) の評価」を一定以上獲得できたと考えるが、一方、志願者が連動して増えている状況とはなっていない。今後、本校に関するネガティブな情報について修正し、発信していく必要があり、きめ細かい指導と安心の指導体制をアピールしていく必要がある。